

## プルドンの労働の哲學と教育論

手塚 壽 郎

## 一

Aimé Berthod が證明してゐるやうに<sup>1)</sup>、平等の追求——之を假に平等主義と名付ける——は、プルドンの生涯のあらゆる時期を貫いてゐる主要なる思想傾向の一であつた。殊に彼の生涯の初期に於てさうであつた。だが平等主義の前には次のやうな疑問が相次いで現はれて來なければならぬ。實際には此平等を如何にして實現するか。平等は人間の自然的なる性質に反する空想に過ぎないではないか。智力もエネルギーも、一言に云へば *capacités* は人々の間に於て常に不平等であるのを、否定出來ぬではないか。此 *capacités* の不平等は、サン・シモン及びフーリエらが云ふが如く、報酬の不平等を必然的に且つ當然に生ぜしむべきではないか。等。事實此らの問題はプルドンによつて既に *Qu'est-ce que la propriété? ou recherches sur le principe du droit et du gouvernement, Premier mémoire, 1840.* 中に提起されてゐるのであり、またそこでは、何らの留

1) Aimé Berthod, Les tendances maitresses de P.-J. Proudhon, La revue socialiste, février 1909, p. 121 et suiv.

保もなく條件の平等 (*L'égalité des conditions*) 及び報酬の平等 (*L'égalité des appointements*) を要求することによつて、此問題を解決した。其後に書かれた物の中でも、此らの問題が繰り返し繰り返し現はれてゐるのであり、次々に新しく且つ深く・デリケートな議論を以て *Qu'est-ce que la propriété? Premier mémoire*. 中の所論を補強してゐる。そして最後にはそれらが一つの労働哲學にまで築き上げられたのである。今こゝで、ブルードンの此らのデリケートな議論を明らかにしつゝ、それらが一つの労働の哲學になつて行つた途行を明らかにする。

## 二

最初の時期に於てブルードンが考へてゐた平等は、賃銀の平等 (*égalité des salaires*) であつた。これはブルードンにあつては自然に出て來た考であつたかも知れない。自ら云つてゐるやうに、當時彼は、彼の *manœuvrière* から、即ち植字工として働いた時から未だ多く年月を経てゐないのであつた。従つて此植字工時代に既に工場に於ける賃銀の平等の理想が彼の頭腦を支配し、それが著作家としての彼の最初の時期に於ても支配的であつたと見てよい。*Qu'est-ce que la propriété? Premier mémoire* では、賃銀の平等は次の表現形式を以て説かれてゐる。「労働者が通常個數拂賃銀を受けてゐる印刷工場では、植字工は、植字一千個について幾何と云ふ賃銀を得るのであり、印刷機械掛は印刷千枚について幾何と云ふ賃銀を得るのである。印刷工場で

も、他の工場と同様にタレント及び熟練は各労働者に於て同一ではない。故に仕事の無いこと“calence”即ち *chomage* の恐がないとすれば、更に換言して版と活字が不足しなければ、各労働者は其熱心の一切を傾け、自らの能力の一切を發揮することが出来る。かゝる場合には、より多く労働する者はより多くの報酬を受けるのであり、より少く労働する者はより少い報酬を受けるのである。仕事が少くなると、植字工及び印刷工は仕事を互に分け合ひ、獨占的に労働する者は盜賊か裏切り者として取扱はれる。印刷職工の此行爲のうちには、一つの哲學が含まれてゐるのであるが、經濟學者も法學者も此哲學にまでは達し得なかつた。もし吾が立法者にして法典中に、印刷工を支配してゐるやうな分配の正義の原理を導入してゐたとしたら、即ち彼らにして大衆の衝動を觀察し、たゞ卑屈に之を模倣するのではなく、之を改良し一般化してゐたとしたら、既に久しい以前から自由と平等とは確乎不動の基礎の上に据えられてゐて、人は所有權を論じたり社會階級の必然性を論じたりしなかつたであらう。<sup>1)</sup>」

此一節中に於ては、プルードンの理想が賃銀については個數拂賃銀であり、生産物一個の賃銀が平等であり、出來高が各労働者によつて異り、従つて各労働者の出來高の相異に基く賃銀の不同こそ眞の平等であると考えられてゐたやうに解釋出來ぬでもない。だが此一節中で一つの哲學であると云つたり、分配の正義だと云つてゐるのは、かやうな意味のものではない。それは印刷工が仕事を分ち合ふと云ふ點に存在する。此哲學は現代のサンデカリズムに存在するものと同一である。サンデカリストは常に先驗的な思辯を排斥し、日々労働

1) Proudhon, Qu'est-ce que la propriété, Premier mémoire, éd. Rivière, p. 223.

者の鬭争の行爲となつて現はるゝもの及びプロレタリアの衝動的行爲を尊ぶ。そして此衝動的行爲はプロレタリアの利益の共同的なる保護行爲となつて現はれる。従つて右の一節では、此共同行爲を平等の形態として謳歌してゐるのであつて、個數拂賃銀を此形態として謳歌してゐるのではない。寧ろ其反對である。

ブルードンが時間拂賃銀をこそ平等主義に合致するものとして謳歌してゐたことは次の一節によつて知ることが出来る。「六時間で一日分の仕事をなし得る労働者は、自らの力と活動力を理由として、より劣れる労働者の權利を奪ひ、労働とパンとを奪ふ權利があらうか。誰人かかゝる態度を支持することを敢へてするであらうか。他の労働者に先んじて仕事を了へる労働者は、休息をなすならばそれでよい。自らの活動力と精神力の維持のために娛樂をなし、運動をなし、有益な仕事をなすのならば、それでもよろしい。かくなすとも、何人の害にもならない。力、天才、勤勉、其他總ての個人的才能は自然の事實であるが、たゞ或程度まで個人の事實ではある。社會は此らの價值を尊重する。だが社會が此らに與ふる賃料は、此らがなし得るものに比例するのではなく、此らが作り出すものに比例する。所で各個人の作り出す物は、總ての人の權利によつて制限されるのである。たとへ土地の廣袤にして無限であり、使用すべき材料が無盡藏であるとしても、『各人その労働に應じて』と云ふ格率は用ひ得られない。何故かと云へば、社會は、之を組成する人民の數が幾何であらうとも、總ての成員に同一の賃銀しか與へることが出来ないからである。而して何故に總ての成員に同一の賃銀しか與へることが出来ないかと云へば、社會は成員の生産物を以て賃銀を支拂ふのだからである。たゞ、いま吾

々がなし來つた假定のうちでは、強き者は其一切の利益を行使することが妨げられてゐないのであるから、社會的平等のまつたゞ中に、自然的不平等の不便が現はれ出づるのである。ところで土地は、住民の生産力と住民の繁殖力との關係に於ては、極めて限られてゐるのみならず、生産物の種類が多數であるのと極端な分業とによつて、社會的課題は容易に充されるのである。即ち生産物の此制限と此ら生産物を作り出すことの容易なるとによつて、絶對的平等の法則が與へられるのである。」<sup>2)</sup>

引用せられた此一節は必ずしも意味が明白ではない。そしてこれは此一節について譯者の理解が不充分であるによるのではない。けれどもプルードンが意味せしめた所は、大凡そ次の如きものであつたと思はれる。個數拂賃銀なるものは、仕事が無限に存在し、また材料も無限に存在し、優秀なる労働者が如何に勤勉に労働するも、劣等なる労働者のなすべき仕事が常に残されてゐる場合にのみ、存在の意義をもつ。然らざる限り、即ち現實に於けるが如く、仕事が無限にあるのではなく、材料が限られてゐる場合の個數拂賃銀は優秀なる労働者をして然らざる労働者の手から生活の必需品を奪ひ取るものに他ならない。これが右の一節の意味であつたと思はれる。

プルードンの此初期の見解は近代のサンデカリストのそれでもあつた。サンデカリストには、個數拂賃銀、出來高拂賃銀は、雇主をして最も低廉な賃銀で労働者を雇傭するを得せしむる手段であると思へたのみではなく、優秀なる労働者のために仕事を攫はれた劣等なる労働者の貧窮を生ぜしむる原因であると思へたのであ

2) Proudhon, Qu'est-ce que la propriété? Premier mémoire, p. 222. (éd. Rivière.)

る。印刷職工の組合は人も知るが如く佛蘭西に於ては最も高度の組織化をもつてゐるのであるが、此組合は此理由によつて出来高拂賃銀に反対の意志を表明したことは一再ではなかつた。例へば一八八九年巴里に開かれた *Congrès nationaux et internationaux des ouvriers* に於て、出版業労働者は個數拂賃銀の制度を排斥し、日給賃銀のみが労働者に最低賃銀を保證し且つ少數の労働者がなす所の生産額の増大によつて生ぜしめらるべき失業を減少すべき唯一の方法であることを主張してゐる。

だが賃銀について示されたプルードンの此平等觀は一時的のものであつた。間もなくプルードンは個數拂賃銀に於てのみ平等の實現を見ることが出来ると考へるやうになつた。賃銀の平等は、コンミニスムと博愛的神祕主義とを含む所の素朴な理想でしかなく、且つ労働者の責任を確實ならしむるためにも、無力であると考へらるゝやうになつた。此頃では、プルードンにとつては、責任なるものは極めて重要なものとなつてゐて、「それは労働者を優秀、中庸、劣等に分つ所の標準であり、同じ材料と同じ工場から出づる生産物の間にさへも價値の差を生ぜしむるものであり、競争 (*émulation*) を刺激し、過大なる要求に止めを刺し、自己を知らざる野心家に突然なる痛棒を食はす所のものである。」<sup>3)</sup> かやうな考の下に、プルードンは一八四三年に公にした *De la création de l'ordre dans l'humanité ou principe d'organisation politique* では、賃銀の平等の主張を捨てて、賃銀と生産高との一致を以て平等と考ふるに到つた。曰く、「賃銀は生産物の大いさ (*produit*) に等しくなければならぬ。もしそれが之より少ければ、労働者に損害又は苦痛があり、反対ならば *munificence* 又は

3) Proudhon, *De la création de l'ordre dans l'humanité ou principe d'organisation politique*, éd. Rivière, p. 348.

usurpation がある。……予は再び云ふ、賃銀は生産物の大いさを忠實に (fidèlement) に表はしてゐなければならぬ。之によつてのみ労働者は各自の仕事の責任をもつこととなるのである。予は附け加へるが、正義は之を欲するのである。何となれば正義は、總ての労働者をして自らの生産物によつて等しい幸福を得せしむることにあるのではある。けれども、然し正義は、功績もないのに報酬を平等にすべく博愛的慈善を強要するほど人の意志を拘束するものではない。コンミュニズムの弱點も主として此處に在る。コンミュニズムは、資本家の壓迫を憎んで、同時に労働者の責任までも消滅せしめようとしてゐる。また人格の自由 (liberté des personnes) を消滅し、分配の正義を打ち破る。<sup>4)</sup>云ふまでもなく、こゝでも平等主義が捨てられたのではなくして、自由主義が平等主義の前面に出て來て、平等主義の顯はれ方が變化して來たのである。

平等主義がかやうな現はれ方の變化をして來たとすれば、Qu'est-ce que la propriété? の Premier mémoire に現はれてゐる労働全收權の否定論は次第に労働全收權に變化せねばならぬであらう。Premier mémoire には次のやうに述べられてゐる。「孤立人はその欲望の一小部分しか満足することが出來ない。人の力は社會のうちにあるのであり、總ての人の努力 (effort universel) の聰明な結合のうちにある。労働の分業と同時に存在 (simultanéité du travail) とは生産物の量と種類とを増加し、職能の特化は消費財の質を改善する。……所で各種の生産物への一般的參化 (participation générale) の争ふべからざる此事實の結果として、總ての個々の生産は共通 (commune) となる。従つて、生産者の手から出づる各生産物は豫め社會によつて抵當權を設定されて

4) Proudhon, De la création de l'ordre dans l'humanité, pp. 346—7. (éd. Rivière.)

ゐるのである。生産者は自らの生産物の一部分しか得る権利がない。此一部分と云ふのは、分母を社會成員總數とするものである。<sup>5)</sup>」

人々は此批判を以て労働全收權に對し殆んど決定的なりと見得るであらうが、プルードンは次第に此批判から離れて寧ろ労働全收權論に接近して行つた。此變化は恐らく當時次第に勢を増大して來たコンミュニズムの運動と思想に對する憎惡によつて生じたものかも知れない。此變化の場合のみではなく、プルードンは、其時々勢を得て來てゐる思想又は權威に對して反抗することを常としてゐた。兎に角 *De la création de l'ordre* の書かれる頃には、彼は、労働者の賃銀と其生産高とを一致せしむるによつてのみ、平等主義を實現し得ると信ずるに到つた。初期の思想の基調をなしてゐた犠牲的精神は影をひそめて、其あとには權利が登場してゐる。一八四六年に書かれた *Système des contradictions économiques ou philosophie de la misère* では、次のやうに述べられてゐる。「博愛と犠牲的精神の上に立つ平和的平等の理論 (*théorie d'une égalité pacifique*) は、此世の快樂と財物を拋棄するカトリック教義即ち乞食主義貧乏の禮讚 (*principe de la gueniserie, panégyrique de la misère*) の偽造に他ならない。人は同胞を死を賭して愛することが出来る。けれども人は同胞のために労働を辭せぬほど同胞を愛することが出来ない。<sup>6)</sup>」結局各人各の生産高に應じて (*A chacun selon son produit*) が平等主義のモットーとなるのである。

だがかやうに平等主義の現はし方に著しい變化を見せたとは云へ、*Qu'est-ce que la propriété? Premier*

5) Proudhon, *Qu'est-ce que la propriété? Premier mémoire*, éd. Rivière, pp. 239—40.

6) Proudhon, *Système des contradiction économiques*, éd. Rivière, t. 1, p. 219.



mémoire に熱情を以て主張された賃銀の平等は其片鱗さへも全く見せなくなつたと云ふのでは勿論ない。此 mémoire の場合にさへも、賃銀の平等が approximative であつたことに疑はないのである。然らば、第一には、労働者の活動を有效果的に働かすに必要な平等な手段を總ての労働者に提供し、(註) 第二には賃銀の決定に生産物の價值即ち生産物の利用と併せて費された労働を考慮に入るゝことによつて、平等の賃銀に近いものが實現せられ得るであらう。而して此らのうちの第一の條件も實現されてゐないし、また第二の條件を充されてゐないと云ふ考の下に、ブルードンは此らの條件の充實のために説くのである。第一の條件の充されてゐない事實は明瞭であるとして、第二の條件が充されてゐないと云ふのは、賃銀が定められてゐるのが生産物の價值即ち社會に齎せられた用役の價值によつてではなく、*personne* を考慮してゐるからである、即ち一方の人の犠牲に於て他方の人を利益するが如き *hierarchie* を労働者の間に確立することによつてである。だからブルードンによれば、「平等は *personne* の承認 (*acceptation de personne*) によつて破壊せらるゝのであり、また之によつて寄生状態 (*parasitisme*)、條件の不平等、職能の均衡の破壊、生産物の誤れる分配が起るのである。」<sup>7)</sup> 今やブルードン *acceptations de personne* を攻撃しつゝ、再び新なる議論を提唱して、報酬の平等を説くのである。

(註) 此第一條件の實現を、ブルードンは無料信用 (*crédit gratuit*) によつて期せんとしてゐたことは、周知の如くである。

7) Proudhon, La guerre et la paix, éd. Rivière, p. 433.

### 三

Acceptions de personne のうちで最も頻繁なのは、サン・シモン派が云ふ所の *capacités* に、またフーリエ派の所謂 *talent* 及び *génie* に對して優遇を與へることである。而してプルドンが此れに加へた批判は實に精細を極め、一八五八年の *De la justice dans la Révolution et dans l'Eglise* では一つの哲學とまでなつてゐる。

*Capacités* 及び *talent* については、プルドンは *Qu'est-ce que la propriété? Premier mémoire* に於て自らの態度を明らかにしてゐる。次いで一八四二年に書かれた *Avertissements aux propriétaires* でも云つてゐる。「*Talent* と *génie* は崇高な語であつて、社會は之をば、途を先に進んでゐる歩哨の如く、又は最も早熟な子供の如くに愛する。然し此らの語は不幸な語であり、自由なる語が市民を生ぜしめた以上に多く奴隸を生ぜしめた。人間群は神の *évocation* にひれ伏したと同様に、*talent* 及び *génie* と云ふ魔術的語の前にひれ伏し、意志は征服された意識のうちに終熄し、精神は停止し、恐怖の幻惑に束縛されてゐる<sup>1)</sup>」と。だからプルドンは初期の著作のうちに於て既に、*génie* の秀れてゐることのために生ぜしめらるゝ尊敬が智と意志とを終熄するのを、極度に嫌つてゐたのであり、個人の絶對なる價值を信じてゐたのであり、權威の前に個人が自らの價值を自覺せねばならぬと考へてゐた。庶民の家に生れ庶民として終始した彼は、*génie* に對抗して、庶民のた

1) Proudhon, *Avertissements aux propriétaires*, p. 40. (Ed. Oeuvres complètes)

めに人としての權利を説いたのであつた。而して此思想が *Les contradictions économiques* 及び *De la justice dans la Révolution et dans l'Eglise* に於て充分に發展せしめられてゐる。

此らの二著作に述べられてゐる所によると、現在では人々の *capacité* の間には重大なる差がある。けれどもそれらは性質的差異ではない。*capacité* の特權を保持しようとする人々は、大多數の人々が劣等な *capacité* をもつてゐるのは如何ともなし難きものであるかの如くに信じてゐる。彼らは、教會の絶望的な *affirmations* に和して、彼らは自らの優越なる地位を永久に維持せんがために *capacité* の不平等が永久に存在することを説く。だが「集團人に於けると同様に個人に於ても、智能 (*intelligence*) は、既に *apprentissage* に先立つて出来上つてゐる *entité* 又は *entéléchie* でなくして、現はれ來り、形成せられ、發展する能力である。或ひは *génie* 或ひは *talent* 或ひは *industrie* なる名で呼ばれようとも、理性 (*raison*) は初め *virtualité nue et inerte* であるが、次第に成長し、強大となり、色づき、結實し、次第に差異を現はして來る。智能は其 *acquisitions* の如何により、一言にて言へば其 *capital* によつて、人々の間に差異を見せて來る。けれども智能はオリデンに於て相等的い力であると考へられねばならないし、社會の進歩は、方法を改善して、此智能を總ての人に於て平等たらしめねばならないのだ。然らざれば、勞働は或者にとつては特權 (*privilege*) となり、或者にとつては罰と等しいであらう。」

*Les contradictions économiques* の右の一節中で觸れられてゐる理性の平等性は *De la justice dans la*

2) Proudhon, *Les contradictions économiques*, t. I, pp. 172—3.

Révolution に充分に展開される。曰く、「或人は同胞中の普通の人よりも多くの事物を見ることが出来る、またより詳細により真相に近く見ることが出来る。次にまたより高所からとより廣汎なる全體に於て見ることが出来る。けれどもこれは認識の *quantité* の問題であり、認識の *qualité* には何らの影響を有つてゐないのであり、少しも確實性を増すものではなく、従つて精神の價值を毫も増加するものではない。このことは人の權利の決定に頗る重大なる意義をもつ。」<sup>3)</sup>「*génie* と庶民との差異の總ては、一方が他方よりより多くを理解すると云ふ點にある。だが理性は兩者に於て同一であり、立法者や革命家や哲學者が人々の間に *acception de personne* をなさないのは、これがためである。また現代文明がデモクラシーに必然的に向つて進みつゝあるのもこれがためである。哲學の支配する所、従つて哲學的理性の *identité* が認められてゐる所では、階級の區別も、教會と國家の *hiérarchie* も不可能である。」<sup>4)</sup>

プルードンによれば、要するに、*génie* や *talent* 等 *capacités* の不平等は生得的であつて如何ともなし難いと云ふやうなものではない。適當な教育制度によつて此らの不平等を極めて小なる程度にまで減少せしめることが出来る。彼は既に *Avertissement aux propriétaires* に云つてゐる。「此らの智能を發達せしめよ、此らの器官を訓練せよ、此らの精神を開放せよ、利己主義のために憔悴せる人類よ。汝らは汝らの所謂優越性 (*supériorité*) なるものが如何なるものとなるかを見得るであらう。」<sup>5)</sup>かくしてプルードンの思想中に教育の問題が極めて重要な地位を占めて來たのである。

3) Proudhon, De la justice dans la Révolution et l'Eglise, éd. Rivière, t. 1, p. 194.

4) Proudhon, De la justice dans la Révolution, éd. Rivière, t. 1, p. 195.

5) Proudhon, Avertissements aux propriétaires, éd. Lacroix, p. 40.

之を要するに、ブルードンに於ては報酬の平等が再び主張されたのであつたが、當初のものとは異つて、後期の主張は *intelligence* や *talent* や *génie* の根本的否定ではなくして、あらゆる労働者に於ける *intelligence*, *talent*, *génie* 其ものゝ平等を基礎とするものである。従つて此場合の報酬の平等の主張は報酬の不平等の主張と矛盾しない。後年に至るに従つてブルードンに於ては平等の主張に自由の主張が次第に勝利を得て來るのであるが、此場合の報酬の平等の主張は此傾向と少しも矛盾しない。

だがそれにしても、夫々の職業の間に職能の差があつて高卑があるのではないか。此疑問に對してブルードンは既に *Qu'est-ce que la propriété? Premier mémoire* に於て答へてゐる。彼は職能に差異があつても、其らの間に上下の差異のないことの證明をアダム・スミスに借りた。スミスは分業の重要なことを明らかにしたが、分業は當然に *capacités* の多様を生ぜしめる。だから社會には多種類の職能が必然的に存在するわけであるが、これらは同じオルガニズムの職能であり、協同的職能である。「裁縫女工はダンサーと同じく *fonctionnaire* であつて、彼らの報酬は同一で無ければならない。」「人間の社會では、職能は相似てはゐない、種々なる *capacités* がなければならぬ。」また「*Donnez-moi, au contraire, une société dans laquelle chaque espèce de talent soit en rapport de nombre avec les besoins, et où l'on n'exige de chaque producteur que ce que sa spécialité l'appelle à produire, et tout en respectant la hiérarchie des fonctions, j'en déduirai l'égalité des fortunes.*」<sup>6)</sup>

6) Proudhon, *Avertissements aux propriétaires*, éd. Lacroix, p. 32.

7) Proudhon, *Qu'est-ce que la propriété? Premier mémoire*, éd. Rivière, p. 226.

8) Proudhon, *Qu'est-ce que la propriété? Premier mémoire*, éd. Rivière, p. 227.

あらゆる労働者の *intelligence, talent, génie* を平等ならしむるためには、プルードンは如何なる方法を採らねばならぬと考へたかの叙述は次節に於てなすこととし、こゝでは右に引用を以て證明したやうな初期の職能觀が如何に變化して行つたかを尋ねよう。

だが初期以後に見らるゝものは變化ではなくして、同じ職能觀の發展又は強化であると云ふべきであらう。一八四八年に彼が新聞紙上に書いたものにも、同じ思想が現はれてゐる。曰く、「一つの蒸氣汽罐を製造するために、Balsano の百章を書くために要する *intelligence* の百倍も必要である。又目に一丁字なき Rhone のパトロンは走り廻つて莫大の精神を傾倒しなければならぬ。此精神の傾倒は總ての *Orientales* に於けるよりも遙かに大である。」<sup>1)</sup> また文學に鋭鋒を向けて云つてゐる、「文學は語とペリオドを排列する術に過ぎない。文學それ自體だけでは、思想も力もない。それだけでは何もものを作り出すことの出来ない *instrument* である。」<sup>2)</sup> 「文學者 (*gens de lettres*) と普通に呼ばれてゐる者は *parasites* である。」<sup>3)</sup> またプルードンは裁判官に批難の鋭鋒を轉じて云つてゐる、「*Tribun de peuple* や辯護士、*patron, défenseur, harangueur du peuple* は、民衆が此らの人々の助力を俟つことなく生活し行動しようとするときには直ちに廢止せられてよい無用の存在である。」<sup>4)</sup> と。プルードンはかやうに所謂 *intellectuels* の意義を引下げ、同時に *travail manuel* に特に重要な意

1) Proudhon, *Mélanges*, éd. Lacroix, p. 39.

2) Ibid., p. 38.

3) Ibid., p. 38.

4) Ibid., p. 220.

義を與へようとする。職能の平等觀を寧ろ超えて、travail manuel の capacités の存在をヨリ多く認めようとする。<sup>5)</sup>而してブルードンは此思想を一つの哲學にまで發展させたのである。

此哲學、Berthod<sup>6)</sup>と共に勞働の哲學 (philosophie du travail) と呼ぶ哲學は Les contradictions économiques に既に素畫の形に於て存在するのであるが、De la justice dans la Révolution et dans l'Eglise に於て決定的な形をとつてゐる。

此書物は sous-title とつて Nouveaux principes de philosophie pratique adressés à Son Eminence Monsieur Mathieu, Cardinal-Archevêque de Besançon をもち、キリスト教の哲學即ち spiritualisme 更に換言すれば人間の行爲の規範を人間のそとに於て神に求むる所の transcendence の哲學に對抗して、人間は自らのうちに存在の原理と規範を有すと考ふる immanence の哲學の樹立を目的としたものである。ブルードンによれば、今日まで勞働が輕蔑せられたのは transcendence の哲學のためであつて、今勞働の réhabilitation の原理を求めようとするれば、物質と精神の結合及び思辨と實踐との結合を揚言する immanence の哲學に赴かねばならない。

ブルードンは先づ spiritualisme の批判から始める。「人は二つの substances から成つてゐる。一つのスピリタス即ち精神によつては、人は、其創造者であり至高者であり判官であり目的である神に屬し、他のスピリタス即ち肉體によつては試鍊の國であり機關である地面に屬する。これは聖ポールが地獄のアダム (Adam terrenus) と天國のアダム (Adam coelestis) との間になした區別である。神から人を離れしむるものは、地面に

5) Ibid., p. 39.

6) A. Berthod, La philosophie du travail et l'école, dans "Proudhon et notre temps", p. 53. 本稿は Berthod の此論文に多くを貢ふ。

向ふ人の性向であり、これこそ人間の弱點であり、悲惨事である。こゝからして、初めから労働に對する輕蔑が生じてゐたわけであり、一切の教派は競つて此輕蔑を激化したのみである。故に労働を輕んじ非難することは唯心的思辨から生じてゐる。予は敢へて云ふが、唯心的思辨哲學は労働の蔑視に役立つたほか、何の役にも立たなかつた。<sup>7)</sup>労働が輕蔑視された結果は、ヨリ優れた生活をなさんとする者をして、労働を忌避し、劣等であると考へらるゝ者に労働を強制するが如き傾向を生ぜしめた。だから、労働を蔑視することから條件の平等 (*égalité des conditions*) が生じたと云つてよい。また此當然の結果として、社會は、支配のために存在する *spirituels* の階級と *charnels* の階級に分裂した。<sup>8)</sup>此らの階級分裂が經濟社會に現はれたものが、一方では「資本家、企業者、地主」であり、他方では「賃銀労働者」(*salariés*) である。<sup>9)</sup>而して選ばれた者があるがためには、必ずや地獄に落つる者がなければならぬのであつて、キリスト教の神話に於ける *dogme de la chute* は階級間の不平等を説明せんとするものに他ならない。

唯心論をかやうに批判した後、ブルードンは、労働が地面の事でもなく試練の一つでもないことを強調する。其場合にフリーエの労働觀が可成り多くブルードンの注意を引いたのであつたが、然し彼は此労働觀が問題の一面にしか觸れてゐないと批難する。フリーエの労働觀は、キリスト教の悲觀論的労働觀とは反對に、労働が人間の本性から毫も離れてゐるものではなく、「精神と肉體の健康に缺くべからざる正しい活動である」<sup>10)</sup>ことを教へた尊い見方である。けれどもそれは、吾々の活動なるものが其行動のために土地と云ふ機關を必要

7) Proudhon, *De la justice dans la Révolution*, t. 2, pp. 267—8. (éd. Rivière.)

8) Proudhon, *De la justice*, t. 2, p. 267.

9) *Ibid.*, p. 259.

10) Proudhon, *De la justice*, t. 2, p. 327.



とすること、従つて吾々の自由は自然の自働性と *facilité* に衝突すること、従つてまた「労働の疲勞と不愉快とは消滅しないであらう」<sup>11)</sup>ことを、忘れてゐる。人間の生活は *combat* であるのだ。

だがそれにしても、労働の快樂は苦痛を越えるには至らぬであらうか。プルードンは此問題を提起し且つ答へてゐる。「宗教の制度の下では、運命が自由を遙かに越えてゐるし、嫌忌と苦痛とが莫大であるが、佛蘭西革命によつて作り出された制度の下にあつては、自由は運命に先立ち、従つて労働の苦痛は減少し、人は、労働の不愉快と恢復への救済方法として發明された娛樂よりは寧ろ労働を好むやうにならぬであらうか」<sup>12)</sup> 答に

曰く、「佛蘭西革命から生れた經濟學者によれば、運命的な側面で即ち外界の必然によつて、労働は嫌忌すべきものであり、苦痛であるが、自由なる側面で即ち吾々の自發的顯現であることの面で労働は心を動かし愉快なものである。加之、労働の嫌忌と苦痛とは、産業の現状に於てこそ大であるが、労働其ものを奴隸にする組織の結果である。けれ共、此らの嫌忌と苦痛とは自由なる組織によつて減少せられ得べく、正義と道德の原理を新らしく發出して、新しい職業教育の體系により、また工場の新しい組織によつて、労働は奴隸的にして且つ奉公人根性的な性質を失ひ、運命が與へた疲勞と嫌忌とを除かれるであらう」<sup>13)</sup>

こゝまで見て來ると、プルードンは労働を蔑視するスピリチュアリズムを批判したる後、總ての労働を同一水準に置く所の條件は工場の新組織と職業教育の新體系であることが明らかになつた。然し總ての労働を愉快なものにすると云ふことはプルードンの重視した點ではない、總ての労働を同様に品位あらしめようとするこ

11) Proudhon, De la justice, p. 327.

12) Ibid., p. 327.

13) Proudhon, De la justice, t. 2, pp. 262—3.

ところ彼が重視した點である。フーリエのやうに、労働を“passionner”し、それを“attrayant”たらしむよりは、それを“ennoblir”することがブルードンの目的であつた。だが此工場の新組織にせよ職業教育の體系にせよ、一つの哲學を基礎としてゐるのであつて、先に云つた平等觀が發展して行つた労働の哲學が即ちこれである。

然らば此哲學は如何なるものであつたか。ブルードン自ら云つてゐるやうに、之を彼は Franc-Maçonnerie に負ふのである。勿論此哲學を Franc-Maçonnerie が明白に表明してゐるわけではない。だが兎に角此 Franc-Maçonnerie には、スブスタンスの否定、第一原因の否定、科學は關係の認識に過ぎぬと云ふ思想がある。これは既に *De la création de l'ordre dans l'humanité, ou principes d'organisation politique, 1843.* の哲學であつた。Franc-Maçonnerie に負へるものあるは明らかである。けれどもブルードンの哲學の獨創的な部分はこのルラチヴィスムにあるのではなくして、科學の起源及び思想と行爲との關係についての説明にある。「労働の解放の問題は科學の起源に密接に結びついてゐて、一方の解決は他の解決に絶對的に缺くことが出来ないし、雙方共に同一の理論に歸着する。即ちあらゆる認識及び技術秩序の上位に *ordre industriel* があると云ふ理論に歸着する。これは次の命題から来る。此命題に曰く、概念は其カテゴリーと共に行爲から來り、行動に歸る。このことは、形而上學をも含んで先驗的と云はれるあらゆる認識が總て労働から來てゐるのを意味する。キリスト教の唯心論及び哲學的自尊心が教へる所とは正反對である。此らのものは概念を *révélation gratuite*

と考へるのであるが、何時に如何にしてこれが現はれるかを説明しないし、industrie は概念の應用に過ぎぬと説くのである。<sup>14)</sup>

「總ての概念は行動より生れ、行動に歸る」なる思想は近代のプラグマチズムを思はしめるけれども、實は之と異つて實用主義的ではない。プラグマチズムによれば、概念は實用的起源をもつに反し、ブルードンによれば、*“En deux mots, l'intelligence humaine fait son début dans la spontanéité de son industrie; et c'est en se contemplant elle-même dans son oeuvre qu'elle se trouve.”*<sup>15)</sup>

かくの如く、概念が行動から生れ、行動が思惟から生れるものでないとしたら、労働は思辨の上に立たねばならぬ。産業人は哲學者の上に立たねばならぬ。<sup>16)</sup> 換言すればブルードンはプロレタリアに、自らの価値の確信を與へ、自らの力の重大さを自覺せしめんとしたのである。これがためには、労働が intelligence を必要とする程度に關して、他の如何なる仕事にも劣るものでないことをプロレタリアをして自覺せしむることが必要であると考へたのである。

## 五

總ての労働の平等を *égalité effective* になすためにも、労働者の職業教育の新體系と工場の新組織がブルードンに於ては必要缺くべからざるものであることが、前節で明らかにせられ、また夫々の職業のうちで總ての

14) Proudhon, De la justice, t. 2, pp. 314—5.

15) Proudhon, De la justice, t. 2, p. 326.

16) Ibid., p. 317.

労働者の *talent, capacities* を平等ならしむるためにも、労働者教育の體系が必要であることも、既に明らかにせられた。吾々は今彼の労働者教育體系と工場組織の理想を示すことによつて、彼の平等主義を歸結にまで追求して行かねばならぬ。

ブルードンによると、現代の工場組織及び労働者教育の缺點は過大なる分業から來てゐる。「労働状態の現實は總て不合理であり、總てが労働者の屈從を生ぜしめるやうに出來てゐる。人は生産の利益のために労働を無限に分割したる後、分割せられた仕事の各を特別な職業の對象とした。そして一度之に従事する労働者はマッネリズムに陥り (*enrouline*) 潑刺たる生氣を失ひ、是から離れることが出來ない。……そのみではない、かくも限られた職能を行ふ結果として、*intelligence* の力を失ひ、手の適應性を失ふが故に、人は労働者の理論的及び實踐的教育をば、此限られた狭い仕事の修業 (*apprentissage*) にのみ限定した。そして此修業のために、人は長年月に亘る無料の奉仕を要求し、青年時代の花と青春の力の粹を要求した<sup>1)</sup>。」

だから此弊から救はるゝがために、即ち總ての労働の *intelligence* を等しからめ、總ての労働者の *talent, capacities* を等しからしむるがために、労働者教育のプランは、一方に於て、生徒をして、*spécialité* の區別なしに簡單なものから複雑なものへと *exercices industriels* の全系列を履習し得せしめ、他方に於て此らの *exercices* からそれらに含まれた思想を抽出し、自由の勝利である所の労働の哲學へ人を導いて行くものでなければならぬ。此方法によつて、産業人、行動人、智能の人は同一人となり、眞に學者であり哲學者である

1) Proudhon, De la justice, t. 2, p. 329.

と云ふことが出来る。<sup>2)</sup>」此引用によつて知り得るやうに、プルードンは労働者をば、自らの仕事の合理的なる研究と、intelligence et organes の同時的研究によつて、職業を支配する原理を次第に深く理解することによつて、更にまた産業のエンサイクロペディア的な認識 (connaissance encyclopédique) —— 理論的並びに實踐的な —— を得せしむることによつて、他の總ての職業人と同一の平面に置かうとするのである。

だがかゝる教育體系の下に高度の職業教育を受け得た者が結局は細分された労働に従事せねばならぬとしたら、分業の弊は依然として残さるゝのではないかと云ふ疑問が残る。プルードンは此疑問の存在を豫想し、之に解決を與へ得たと信じてゐる。即ち apprentissage の組織に加へて工場の新しい組織を導入して之を解決し得たと信じてゐる。

工場 (atelier) の組織は農業や小工業の場合には殆んど問題にならない。此らの仕事に於ける労働者は自由に其仕事を轉換出来るのであつて、分業の弊は現はれ得ない。従つて工場の組織が問題の中に入つて来るのは大工業の場合である。プルードンは此場合の問題の解決を再び *Franco-Maçonnerie* のドクトリンに求めるのであつて、それは次の如きものである。

「一、労働者教育は、各産業の特殊的専門の點に關してもまた産業一般の點に關しても、全面的に總ての労働者に與へられねばならないから、職能が分割せられてゐる大工業の工場は、*apprentissage* の途上にあつて未だ *associés* となつてゐない個人に對し、仕事場 (*atelier de travail*) であると同時に理論及び應用の學校 (*école*

2) Proudhon, *De la justice*, t. 2, p. 332.

de théorie et d'application) でなければならぬ。

「二、だから産業に従事する者は、自ら提供する service public のほかに、apprenti 及び compagnon として、労働の義務を負ふ。此義務は、此らの者が一定の期間 salaire proportionnel によつて、工場の特種性をなす總ての仕事をなすことによつて果される。而して此らの人々は、後には、associé et maître として、工場の経営及び利益の分配に預からねばならない。

「三、最初の apprentissage 中に得られた capacité 及びそれによつて權利となつた報酬によつて、若き労働者は其知識を増加し他の産業の新しい研究によつて talent を完全になすことに利益をもつであらう、決定的な地位を得るまでこれらのことをなすであらう。

「要するに、L'apprentissage polytechnique et l'ascension à tous les grades. これこそ労働者解放の途である。<sup>3)</sup>」

ブルードンの教育體系は主に労働者教育のそれに關するものであるが、それは結局工場即學校 atelier-école と云ふ體系に盡きる。彼は一再ならず此システムを強調し、一八六三年に出版された Du principe fédératif et de la nécessité de reconstituer la parti de la Révolution. の中でも、<sup>4)</sup> “une combinaison de l'apprentissage et de l'écolage” の必要を力説してゐる。而して atelier-école は若き人々の capacité を増大するためにのみ必要なのではない、一國の教育費の節約のためにも必要であるとブルードンは云ふ。「佛蘭西の人口を四千萬人と推算

3) Proudhon, De la justice, t. 2, pp. 338—9.

4) Proudhon, Du principe fédératif, éd. Iacox, p. 81 en note.

し、其中七歳から十八歳までの八百萬人が就學してゐる。……此男女八百萬人の教育には年々十六倍六百萬フランの費用を要する<sup>5)</sup>。」もし九歳に達したる者が *atelier-école* に於て生産に従事しつゝ知識と技術を習得するならば、右の巨大なる教育費は殆んど全部補償せらるゝであらう。また「今日人々のなしてゐるが如く、教育と *apprentissage* とを分離するのは、殊に一層悪いことだが職業教育と職業の日々の眞面目にして有用なる實行とを分離するのは、或形式で *séparation des pouvoirs* を復活することであり、階級の區別を復活することである。此らの二つは政府の暴政と労働者の從屬とを生ぜしむる最も力強い道具である<sup>6)</sup>。」

ブルードンはかくの如く *atelier-école* の教育體系を主張すると共に、進んで此教育體系を労働組合の統制の下に置かうとするのである<sup>7)</sup>。

だが之を以て直ちに、ブルードンの *atelier-école* の教育が職業的實踐的教育に終始したと考へてはならぬ。ブルードンは、*atelier-école* をして、實踐的職業的教育と共にこれから導き出され得べき理論的教育を興ふる機關たらしめようとするのであつた。

5) Proudhon, de la capacité politiques des classes ouvrières

6) Proudhon, Idée générale de la Révolution au XIX<sup>e</sup> siècle, éd. Rivière, p. 327.

7) Proudhon, De la capacité politique des classes ouvrières, éd. Rivière, p. 343.